

## <書評論文>

# 環境問題における「共同構築」の可能性

Alan Irwin, *Sociology and the Environment:  
A Critical Introduction to Society, Nature and Knowledge.*  
(Polity Press, 2001)

江 南 健 志

## 1 本書の構成と紹介

「環境」という用語は、現代社会を代表する用語の一つである。環境問題が社会問題として現代社会において大きな位置を占めるに伴い、社会学において「環境」問題を読み解くために従来の分析枠組みを再考する試みが続けられてきた。社会学はどの様にして環境問題と取り組めばいいのか？また、環境問題を読み解くに当たってどのような学問的枠組みを提示できるのか、もしくは作り出せるのか？著者 Alan Irwin はこれらの問題を本書のテーマとしている。

本書の全体的な構成として、Introduction において環境問題と社会学の間に横たわる古典的なテーマである「社会／自然」の二項対立の問題と本質主義／構築主義の問題を取り上げている。本論は全部で7章構成になっており、著者は主要な環境問題として現出している様々な事象の中から、下記の3点を環境社会学のテーマとして選出した。①持続可能な発展 (sustainable development) ②リスク社会 (risk society) ③環境知識 (environmental knowledge) と科学知識の社会学 (sociology of scientific knowledge) である。まず最初に、これらのテーマについて概観する。

### ① Sustainability (持続性) の概念

環境問題における主要な概念の一つである「持続性 (=Sustainability)」について言及する。ここでは、重要で現代的な環境問題の一つの「枠組み」として持続可能な開発について考察している。このテーマを取り上げた目的は、現代の環境政策決定の中心に位置する複雑な社会的な議論や政策論争を概観し、持続性の概念が社会変化の中で如何にして社会経済政策上の重要なキータムとなり得たかを説くことにある。

「持続性」の制度上の定義を考えるに当たり、一つの重要なレポートを例に取り説明している。それは1987年に提出されたブルントラント・レポートである。ここではじめて「sustainable development

（持続可能な発展）」の概念が提起され、持続性という概念に国際的な焦点を当て、環境論争に新しい論点が与えられた。

ブルントラント委員会の特徴は、経済発展と環境問題の両方を広く定義したことにある。ここでは、経済成長と環境保護は矛盾するのではなく相互依存的であると定義された。この報告書について、持続可能な発展という考えは北側諸国のパースペクティブから生まれたものであり、そして北側のパイアスの影響を受けていると言った批判も噴出した。しかし持続可能な発展の歴史にとって重要な点は、新たな国際的なパースペクティブとして 1970 年代以降の環境危機というコンセプトを融合し始めたことであった。

社会学用語としての持続可能な発展を考察すると、ブルントラントの提示した枠組みは環境に関する様々な問題や関心事項を提起したことは明らかであり、持続性というムーブメントは環境社会学にとってインスピレーションをかきたてられる重要なソースであることは間違いない。

## ② The Risk Society（リスク社会）という視点

環境に関する議論の枠組みとして持続性の概念が先に提示されたが、それとはより批判的な距離を採るために、環境問題を理解するための対照的な社会学的枠組みとして「リスク社会」というテーマ、つまりリスクマネジメントと環境問題の関係性を取り上げる。ここでは、現代における社会諸制度が環境に重大な影響を及ぼしかねない可能性を有し、それによって様々な問題が噴出するという議論を展開している。これによると、知識、リスク、そして信頼性の関連を含む社会的利害関係によって、環境問題は発生する事にもなり、またそれによって発生させられると考えられる。リスクと環境に関する関心事は、社会発展の単なる副作用として消去されることは出来ない。著者はモダニティやモダニティの構造の方向に採って、様々なリスクを深遠な問題として提起している。環境社会学を議論するためには、社会学と環境の広義の関係にとってリスク社会の議論の持つ意味を考えることが重要になっていると認識している。

リスク社会という見方は、U.ベックによって提起された。彼の著書『リスク社会』での分析は以下のようなになる。国家や政府と言った中央集権化された諸制度は、今日の環境やリスク関連事項に対して素早く対応することは基本的に不可能であり、またそれらの諸制度は発生しうる様々な危機に陥る危険性があると述べている。

持続可能な発展というキーコンセプトを打ち出したブルントラントレポートとの明確な差異は、U.ベックが科学を次のように考えている点である。それは、「自然や人間にとっての地球的規模の汚染に対して、防護する可能性を持つ」こと、つまり環境問題に対する科学の有用性を積極的に肯定している点である。環境にかかわる危機や脅威と言った U.ベックが扱ってきた内容にとって、一般的なアプローチもまた様々な問題を提起している。ブルントラントレポートは、環境が「外的な」脅威として

象徴されるという簡単なスタンスを採っているのに対して、U.ベックは環境の危機を同時に社会的かつ自然的なものとして説明している。

筆者の考えるリスク社会という理論的枠組みの評価は次の通りになる。モダニティの今日的な特徴に対する U.ベックの説明は、社会学的分析にとっての最終地点として代表されてはいない。しかし、環境問題についての一連の重要な問題、そして環境問題を扱うために必要とされている社会学的説明への道筋として代表されている。環境問題にアプローチする重要な枠組みの一つとして紹介されている。

### ③ 環境知識 (environmental knowledge) と科学知識の社会学 (sociology of scientific knowledge)

科学知識の社会学 (the sociology of scientific knowledge, 以下 SSK と略す) は社会／自然関係を社会学的に解釈するための三つ目の枠組みとして、本著で取り上げられている。

「科学的根拠となる実験事実や科学的概念は客観性や普遍性を中核に持つ」という常識的な判断に対して、どこまで留保を与えることが出来るのかが SSK の主要な任務であったという。「SSK は、当初科学理論の内部の概念的な変遷を史的に俯瞰しながら、その論理的発展を跡づけるインターナショナル派に対抗する形で現れ、1970 年代半ばからそれまで不問に付されてきた科学理論の内容そのものを社会学的に分析するようになった。」<sup>1</sup>

環境問題に対する社会学的分析を支配する「自然主義的」な議題に挑むだけではなく、社会と自然の因習的な分離を再構築している。「環境知識」の定義は社会学的調査にとって重要な分野になっている。SSK アプローチは、社会と自然に関する一般化された主張から導入され、そして環境問題や関連事項が複合され共同構築された特徴を強調するようになる。社会が自然のどちらかにプライオリティを与えるよりも、特定の文化的、制度的そして生態学的な状況下で社会／自然両カテゴリーの構造を精査することが必要となると説いている。

## 2 自然を巡る社会学的認識——「社会／自然」の二重性と「共同構築」——

まず最初に本書の個別事例について触れてきたが、環境社会学を読み解く上で筆者が必要と考える 2つの問題、従来の社会学のもつ「社会／自然」の二重性に関する問題と本質主義／構築主義によるアプローチの問題について言及しておきたい。

筆者は、古典的な社会学理論におけるアプローチが従来の「社会／自然」の二項対立の軸のみでしか社会現象を捉えていないことを指摘している。そして、それにとって代わる学問的枠組みの必要性

<sup>1</sup> 金森修、2001、「科学的知識の社会構成主義」『現代思想のキーワード 現代思想臨時増刊号』28(3):176.

を示唆する。社会学の議論の中に環境問題を組み入れることは、社会と自然の全ての関係や社会／自然関係の上に作られた学問上の構造を再評価することを意味する。つまり、環境社会学は、社会学が従来持っていた「社会／自然」という枠組みから離れた新たなパラダイムを提起しうる可能性を有していると説いている。

本書の中で環境について次のように言及している。「我々が環境被害者ではないという観点を排除して、環境の持つ意味を議論することが出来ないのは明白である。環境とは「所与の」ものではない。それは創造され、解釈されるものなのだ」と。本書における主たる目的は、学問上の関係と実践的な関係の両面において社会学と環境問題の関係を新たに探り出す事にある。以下では、「社会／自然」の二重性と「共同構築」の概念について触れたい。

### ①「社会／自然」の二重性と社会学

いままでの社会科学的な分析において、人間が作り出した（もしくは社会）環境と自然環境を当初から区別してきた。そこでまず最初に、社会学における「社会」と「自然」の二重性について言及したい。

科学という分野において「社会」と「自然」を峻別すると、文化・歴史・人間関係といった「社会」環境は社会科学の範囲として見なされ、一方、動植物の生態・「自然」環境は自然科学の範囲とされてきた。まさに「自然環境」という言葉が暗示するように、社会科学の適用範囲外としてエコロジーや地球環境変化の問題が考えられており、自然環境は一般的に人間の作用や介在の外側にあるものとして示されている。また、自然と社会は分離され得るという社会学的仮説が存在することも社会科学が環境問題の範疇から切り離される要因となっている。

社会と自然を明確に分離する事は、社会学が学問的アイデンティティを確立するための必然性と結びついている。特に、古典的な社会理論においては環境問題と相反する関係にあった。

最近まで人間活動や社会発展の生態学的影響に関する議論が社会学上で行われていなかった。Goldblatt は次の様に指摘する。「古典的社会理論の限界は、まず第一に、社会と環境の間の相互作用を理解するための適切な概念的枠組みがないこと。第二に、人間社会が環境を変容させることが否定的な結果をもたらすことを留意せずに、人間社会が環境を変容させる方法に焦点を当てていたことにある。」

環境問題にアプローチする場合、社会学の古典的研究の「懐疑的遺産 (questionable heritage)」について考察する必要がある。そこで、筆者は社会学の巨人である K.マルクス、M.ウェーバー、E.デュルケームの三名の古典的社会学理論について言及する。社会学のパースペクティブから概観すると、A.コントや H.スペンサーなどの 19 世紀初頭の理論家は、社会学的な説明の基礎として生物学的で進化的な概念を引用していたし、マルクスもまた自然状態（この場合では、土壌や気候）が労働の分業を

引き起こすと説いた。

その後、デュルケームとウェーバーの出現から、「社会に対して自然がインパクトを与える」という最初の議論から推移する。社会学が一学問としてのアイデンティティを確立するため、その独自性をいかにして世に問うかが社会学を立ち上げるための重要な問題であった。ドイツにおいて、社会学が「自然」に対していかなる信用を与えるべきかについて議論されたが、ウェーバーはこれらの「自然」という要素を社会学に含めることに積極的に反対した一人であった。ウェーバーがなぜ反対したのか、Stehr と Grundmann が指摘するのは以下の2点である。まず第一に、社会学に「学問的独自性」を与えるため、もう一点は、自然主義的もしくは生物学的概念に依拠しないポリティカルな側面を発展させるためである。

デュルケームの定義における信条は、社会的事実とは他の社会的事実によって説明されなければならないと言うことである。つまり、気象条件や季節と言った自然の要因ではなく、社会的な要因によって説明されるべきであると考えた。Redclift と Woodgate は次のように言っている。「近代社会学建設の父として、自然環境は「社会」ではないとして否定的に定義されたのだ」。つまり、ここでも自然環境は社会学的対象から排除された。

マルクスは19世紀の労働者の過酷な健康・安全状態について数多く説き、自然資源や都市環境が悪化することを資本主義の否定的なインパクトとして言及していた。P.ディケンズは批判的本質主義を描出する“green social theory”を提起するためにK.マルクスから得た様々なアイディアを発展させた。

この様に、従来の社会学の研究からは自然の問題は離れたところにあった。しかし、近年の社会学的な研究の中には、「自然科学」と「社会科学」の間の二分法に対してシステムティックに挑戦することに価値を見出すものも存在し、その為、社会科学と自然科学を分離することよりも、両者の相互作用や相互依存を調査することに重要な意味を見出すようになってきている。

## ②環境社会学における本質主義／構築主義

何度も強調されてきたが、社会／自然という二項対立の問題は社会学において環境問題を考察する上で要諦となる。社会学の焦点は人と人との関わり、つまり社会の範囲内にとどまり、社会生活を含む自然の重要性を拒絶することによって環境社会学の発展が阻害されてきたといえよう。我々は環境問題を内包する社会と自然の関係をどの様にして理論化すべきなのか？ここで、現代社会学内にある重要なパースペクティブについて言及する。

その一つとして、本質主義（realism）と構築主義（constructivism）の議論について触れたい。

まず最初に、環境問題をどの様に捉えるかで本質主義的議論を採用か構築主義的議論を採用かという問題に直面する。ここでは、環境を外存的存在（客観的本質として）と捉えるのか、それとも社会

関係や形態によって構築されているのかについて言及している。

構築主義は広い意味で不可知論的に環境に関する事実追求に関係する社会学的アプローチを示す。これに対して、本質主義は社会生活の中にある自然の重要性を強調し、独立した力を持つものとして自然を捉える。これを環境問題について言い直すと、環境問題は社会構造の一つとして捉えるのか、「本質的」な問題として捉えるのかという差異があるということになる。構築主義論者は地球が全く物質的なものを持たないと主張するし、本質主義論者は環境問題は単に社会に影響を与えるだけだと力説するであろう。

著者は構築主義と本質主義についてのこのような議論を不毛なものとして回避する意図をもって論を進めている。つまり、自然が本質的であるか構築されたものであるかどうかという議論は、抽象的用語のやりとりであって結局は解決不可能になるのであると考えているのだ。自然と社会のどちらか一方にプライオリティを与えることはここではしていない。

ここで著者は、環境問題を認識し探求するための彼独自の分析枠組みである、社会／自然を「共同構築 (co-construction)」するプロセスの重要性を説く。「共同構築」の枠組みは、以下のような形である。人間社会を取り巻く自然を既知のものとし、自然そのものが本質的に存在するものとして定義する。その自然と社会（もしくは人間）との関わりを多様な角度からアプローチし、その関係性を構築していくことである。つまり、環境に関する社会学の焦点は「自然」そのものではなく、「自然」と「社会」の関係性を模索し追求することであると。

しかし、ここに述べられた「共同構築」の枠組みは、これは農村社会学や地域社会学から発展した日本の環境社会学の分析枠組みにおいて、既に行われてきたと言えよう。例えば、生活環境主義における枠組みでは、「分析者自身が「当該社会に居住する人々の生活の立場」に立つことを決め、居住者の「生活」に問題解決の強調点を据えた」分析手法である。つまり、社会を取り巻く自然環境を独自のかつ既存の存在と規定し、自然環境に関わる人々、特に環境破壊によって何らかの利益／不利益を被りながらその地に居住する人々が如何にして環境との関係や地域社会との関係を結んでいるのかに焦点を絞っている。まずはじめに自然環境それ自体を既存のものとし、自然環境の変化によって地域住民がどの様に環境問題と呼ばれるものに対処するかを描き出す手法は、広義に見れば「共同構築」に当てはまるのではないだろうか。筆者が独自の見解として考えている「共同構築」の概念は、環境社会学という分野において既に取り入れられていたのである。

### 3 「共同構築」とSSK——むすびにかえて——

それでは、筆者の言う「共同構築」という概念を継承し、それを乗り越えていく可能性を持つものは何か。ここでは、前述した科学知識の社会学、SSK について再度着目してみたい。

なぜ、環境問題は「問題」となるのか。環境問題を「問題」とらしめる根拠は、自然科学がもつ実験的事実の客観性や普遍性の文脈から出発しているといえる。例えば、環境政策に影響を及ぼす経済学や政治学もまた何らかの形で自然科学的認識に依拠せざるを得ない。環境問題に関する諸政策は何らかの科学的事実の裏付け無しに立案され施行され得ない。ならば、「環境問題」とはつまるところ、「科学的認識」の所産であると言えないか。環境問題のみならず、現代社会の諸問題が自然科学的認識と産業活動に代表される社会生産活動によるものであることは明白であり、それら多くの問題が科学的認識を経ずして語られることは不可能である。

環境問題においても、様々な問題が持ち上がりまた不問に付される問題も存在する。それらに関与する人々が何らかの対策や抗議を行う場合、それら諸問題にある種の順位付けを行い、取捨選択し、解決に向けて戦略的な行動を起こす場面でも科学的根拠を元に行われる。その根拠となる科学的認識を問うことが当該問題に関わる人々の活動を描き出す一つの方法となりはしないか。経験的事実や実験によって証明された事実の集積によって紡ぎ出された科学もまた、社会的文脈の外部に存在せず、むしろその社会的要因によって規定されている。平川秀幸は次のように述べている。「科学・技術が浸透し尽くした現代では、未決着の科学論争やリスクを伴う技術の利用が、政治的意志決定や、健康や環境を大きく左右する」<sup>2</sup>。

SSK は科学理論や概念を社会学的文脈と接続することで、科学の自律的神話にも一石を投げ、一般に既知とされ神話化された自然科学に対してある種の疑問符を投げかけた。SSK は、誤った理論に対してだけに歪曲要因としての科学外的圧力に着眼するのではなく、いわゆる正しい理論の場合でもそれを促す社会的要因を探るべきであるとする。

本書において、自然そのものの存在を本質的な独自性を持つ存在と規定し、自然と社会の関係を構築的に捉えるという枠組み（「共同構築」の考え）が提起された。しかし、「共同構築」の枠組みはそれ自体が構築主義／本質主義の折衷的な色彩が強く、曖昧模糊とした感が否めない。「共同構築」のコンセプトに外れず、人々の環境認識の深淵に潜む自然科学の存在自体をえぐり出す SSK の手法は、環境問題を社会学的に取り組む上で新たな方策となるだろう。

<sup>2</sup> 平川秀幸、2001、「サイエンス・ウォーズ」『現代思想のキーワード 現代思想臨時増刊号』28(3):184.

## 参考文献

- McCormick, John, 1995, *The Global Environmental Movement*. (=1998, 石弘之・山口祐司訳、『地球環境運動全史』岩波書店)
- Danlap, Riley E. and Mertig, Angela G., 1992, *American Environmentalism*. (=1993, 満田久義監訳、『現代アメリカの環境主義——1970年から1990年の環境運動——』ミネルヴァ書房)
- 飯島伸子編、1993、『環境社会学』有斐閣.
- 平川秀幸、2001、「科学・技術と公共空間」『現代思想』29(10): 195-207.

(えなみ けんじ・修士課程)